



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集

常滑の急須物語

vol. **47** | 季刊 2018 春





特集

常滑の急須物語

九百年の歴史を持つ「六古窯」のひとつ、常滑。

甕や壺など大物のやきものを焼き、

やがて、日本の近代化を支える窯業地として発展してきた常滑ですが、

その一方で、「小細工物」のひとつとして、技巧をこらした急須の伝統も脈々と受け継いできました。

今では、「急須」は常滑焼の代名詞ともなっています。

その始まりは、どのようなものだったのでしょうか。

先人たちは、情熱と知恵をどのように注ぎ込んできたのでしょうか。

今回は、常滑の「急須」を巡る物語——。

ききふす



写真上: 鯉江廣氏作 写真下: 谷川 仁氏作 撮影協力/SPACE とこなべ

INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

01 [特集] 常滑の急須物語

LIVE SCHEDULE

これからの催し

06 企画展「急須でお茶を一宜興・常滑・香味甘美」

LIVE REPORT

開催報告

07 企画展「天然黒ぐろ一鉄と炭素のものがたり」

関連ワークショップ
木炭で遊ぶー手づくり木炭で描こうー

黒ぐろ講座[1]
対談「墨 違いのわかる、墨の見方」

08 黒ぐろ講座[2]
講演「黒の漆 基礎からわかる漆の見どころ」

黒ぐろ講座[3]
黒茶碗の茶会&講演「やきもの つくり手から見た、茶と黒の勘どころ」

黒ぐろ講座[4]
講演「黒の誘惑 二輪というプロダクトデザインを通した「黒の魅力」」

09 モザイクタイルで作るアクセサリーワークショップ

窯のある広場・資料館 保全工事レポート4

CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS LETTER

vol.47 | 季刊 春
2018

〈表紙写真〉

4	2	1
5	3	

- 1 大正時代の煙突の保全工事が無事終了しました。
- 2 ミュージアムショップで。
- 3 春の陽を受けて、カラフルな影が映し出されて。
- 4 陶楽工房に飾られたデコ・モザイク。
- 5 春色のタイル。さてどこでしょう。



ライブミュージアムに吹く風 4



地に足をつけ 笑顔で次の風を待つ

「窯のある広場・資料館」の保全工事を行っています。この施設は21mの煙突と煉瓦組みの大きな窯を内包する建屋から成り、1921年から半世紀あまり土管やタイルを焼いてきた工場です。中に入ると、焚き口に石炭をくべる職人たちの息づかいが聞こえるような迫力があります。6館で構成されるミュージアムは、まさにこの「窯」から始まっています。往時の常滑のものづくりの熱と臨場感を今に伝えるこの施設を良い状態で保存し、より素晴らしい展示館にリフレッシュしてみなさまにご覧いただくことが、館長として初の大仕事となりました。光栄に思うと同時に、重い責任を感じています。

INAXライブミュージアムにはこれからもさまざまな風が吹くでしょう。追い風、向かい風、頬を優しくなでる春の風、大嵐。どのような風が吹こうとも、しっかりと地面に足をつけ、笑顔で次の風を待つ。そんな心構えで、このミュージアムを運営していきたいと思っています。

尾之内明美（INAXライブミュージアム館長）

現在につながる煎茶は江戸
京都の売茶翁・高遊外
売茶翁は煎茶道具を担
茶を飲みながら禅や茶の
これが江戸後期、中国の
煎茶は京都や大阪の文
やがて江戸にも広がって
ここで使われた茶道具の
中国から伝来した急須の
常滑の急須づくりも、
京都に次ぐ早い時期に始

技術が生んだ 常滑の急須

「文化文政の時期(1804-1830)につくら
れた急須 1 が存在しています。それらは壺や
甕と同じ土、同じ手びねりの紐作りでできてい
ます」と話すのは、とこなめ陶の森資料館学芸
員の小栗康寛さんです。背景には、常滑の職人
たちの進取の気質と、彼らがすでに十分な技術
をもっていたことがあるのでしょう。

天保年間(1830-1844)になると、陶工で
あった鯉江方救・方寿父子が瀬戸の技術を入れ
て登り窯を導入、高い温度で焼ける窯が登場し
ます。「真焼」と呼ぶ高級な甕の大量生産が始ま
ります。その窯に徳利や急須もいっしょに入れ
て焼くようになった。窯の技術史から見ても、
常滑の急須づくりは江戸後期に始まったと言え
ます。

その頃から、土の研究も始まりました。お
茶に合う色の急須はできないか。そして登
場したのが白泥土の急須です。二代伊奈長三
(1780-1857)は焼くと白くなる土を見つけ、

ロクロ技術の巧みさとともに、その名を江戸や
京都にまで知られるようになりました。なかで
も、海に近い地の利から生まれた「藻掛けの急
須 2」は、高い人気を博しました。

究極の急須の色 「朱泥焼」の成功

当時、すべての急須の産地がめざした究極の
色は、中国江蘇省宜興窯で焼かれた急須 3 の色
でした。鉄分を多く含む「紫砂」と呼ばれる粘土
の色です。その開発にいち早く成功したのは、常
滑の名工 杉江寿門 4 (1827-1897)でした。

「田んぼの下にある灰色の粘土を8割、山に
ある鉄分の多い赤土を2割。それを水簸という
方法で2、3年かけて精製してきめが細かい粘
土にする。さらに、還元焼成の最後に酸化させ
るという焼き方で、この朱泥焼を成功させたの
は安政元年(1854)のことでした」と、小栗さ
ん。失敗してもあきらめず、創意工夫を重ねて
挑戦していった職人の魂を感じます。

こうして常滑は、憧れの宜興窯と同じような
急須がつくれるようになりました。幕末から明
治にかけては、富裕層の間で煎茶ブームが起こ
りました。常滑の廻船問屋 瀧田家の古文書に
は、月に千個、二千個という単位で江戸に急須
が運ばれていたという記録があります。



小栗康寛さん
Yasuhiro Oguri
とこなめ陶の森資料館学芸員



1
上村信吉 作
真焼横手急須

(江戸時代後期
とこなめ陶の森資料館蔵)
手びねりで、壺や甕と同じ
土を用いている。急角度で
つけられた把手(取手)は
時代の特徴。自然釉が美し
く掛かっている。



2
二代伊奈長三 作
白泥藻掛け横手急須

(中村真二蔵)
白泥土に乾燥させた小甘藷
を巻き付けて焼成したもの。
藻に含まれる塩分が作用し
た部分が赤褐色に発色し、
藻は金色になる。海のある
常滑ならではのオリジナルの
加飾技法。火色焼ともいう。



(清朝代後期 友仙窟蔵)
左: 紅顔少年
中: 萬豊順記
右: 粗作茄子
富岡鉄斎箱
撮影: 中川高史



4
初代杉江寿門 作
朱泥菊型後手急須

(バンバン製法 明治10年代
故岩橋茶吉コレクション)
上から見ると、16枚の花弁
の菊花になっている。装飾
も格調が高く、常滑の卓越
した技術を今に伝える名品。



1 売茶翁肖像画 友仙窟蔵 撮影: 中川高史
2 鯉江方寿翁像 (常滑天神山 平野霞管作)
3 朱泥急須の碑 (常滑天神山) 朱泥焼を開
発した初代杉江寿門と片岡二光を称え、二
代寿門によって建立された。4 初代杉江
寿門作 宝瓶急須の土型 (とこなめ陶の森資料
館蔵) 常滑では、明治10年には土型による
本格的なやきものの量産体制が確立してい
た。土型で制作されたとみられる連型急須
や宝瓶に後手を付けた急須もある。



6 四代伊奈長三 作
烏泥菊型後手急須

(バンバン製法 明治10年代 中村真二蔵)
菊の花言葉である「高貴」な気品をみせる傑作。四代長三の急須の蓋は、獅子や薔薇の柄など技巧的な作品が多い。

憧れである
宜興窯の
製法を知りたい



明治11(1878)年、鯉江方寿は、来日していた中国人の金士恒^{きんしこう}5を常滑に招き、工房の職人だった初代寿門、四代伊奈長三(1841-1924)らに、宜興の急須制作技術を学ばせませす。すでに宜興と遜色ない急須をつくっていたにもかかわらず金士恒を招聘したのは、憧れである宜興の技術を実際に知りたい、さらに良い急須をつくりたいという強い気持ちがあったからに違いありません。

常滑の土は粘りがありロクロを使って成型するのに対し、宜興の土は粘りが少なく、筒状に巻いた粘土板を木のへらで叩いて成形する、いわゆる「バンバン製法」と呼ばれるものでした。土の違いと量産に適さないことから常滑で根づ

5

金士恒 作
紫泥後手急須一双



(バンバン製法 明治11年 故岩橋栄吉コレクション)
金士恒によって光緒4(1878)年につくられた一対の急須。鉄筆で詩と竹の絵が刻まれ、煎茶の美意識が広がっている。



市民の暮らしに
広がるお茶文化

中国との戦争が始まる時代になると国粋主義が高まり、中国文人茶系の煎茶は下火になっていきました。一方でお茶は、庶民の暮らしのなかに広がっていきます。昭和40年代、常滑の急須づくりは黄金期を迎えます。急須における鑄込み技法*の開発で量産を可能にし、急須とお茶の大衆化に寄与してきました。

伝統的な急須づくりも健在です。三代山田常山⁷(1924-2005)は、1998年、常滑焼(急須)で愛知県初の国指定・重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されました。「伝統的な技術を守るだけでなく、土にこだわって、その可能性を広げ、形や焼成技術などで急須づくりに革新をもたらしたことが評価を受けた」と、小栗さんは考えています。

そんな祖父の姿を見て、「可能性のある世界」と五代目を継ぐことを決めたのは山田想⁸さん。常山窯に受け継がれる伝統的な朱泥や焼き締めに加え、トルコ釉を薪窯で窯変させる新しい作品にも挑戦し、手ごたえを感じています。時代に憧れ、時代を切り拓き、新たな文化を生み出してきた急須づくり。次世代の急須は、私たちにどんな暮らしの風景を見せてくれるでしょうか。

*石膏型に泥しように流し込んで急須の各部をつくらせて組み立てる製法



7 三代山田常山 作
朱泥急須横手急須

(とこなめ陶の森資料館蔵)
三代山田常山は生涯に100種類以上の形を創案したと言われるほど、多彩な急須の世界をつくり上げた。



8 山田 想 作
常滑急須

薪窯で焼いており、自然釉が掛かって窯変している。青の釉薬も少し掛けてあるため、面白い色の出方をする。



8 山田 想 作
青急須

青い釉薬を掛け、薪の窯で焼いているため、かなり窯変している。青のシリーズの一つ。



山田 想さん 陶芸家
So Yamada

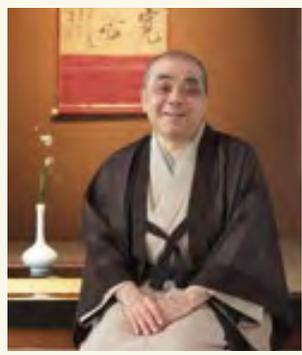
常山窯の五代目。祖父の三代山田常山から直接教えを受けた朱泥急須のほか、四代目までにはなかった作品「青のシリーズ」など、創作の世界を広げている。

煎茶道と茶具

高取 友仙窟 煎茶道 賣茶流家元
Yusenkutsu Takatori

「煎茶」は「茶の湯」より300年ほど後に生まれました。江戸時代中期、体制に追従しないで自由に生きた中国文人の暮らしに憧れる人たちの間で流行し、煎茶中興の祖 売茶翁の周りには、琴棋書画、漢詩といった文人の教養を持つ人たちが集まってきました。画家の伊藤若冲は親友で、「若冲」の命名にも関わっています。幕末には知識や教養はあるけれど封建社会で生き場のない人たちが、いわゆるアウトローですね、勤皇の志士、下級武士、お公家さんなどが盛んにたしなみしました。明治になると財閥人の趣味として大流行します。

茶の湯は「茶禅一味」というように修業のような白黒の世界ですが、文人の遊びにルーツがある煎茶道はカラフルです。なかでも中国文化への憧れの象徴が、赤い紫泥の中国宜興の急須でした。



5

5 煎茶道茶具 6 修竹園 金士恒作(明治11年 友仙窟蔵) 撮影:中川高史

